

研究と報告

自閉症にみられる相貌的知覚と妄想知覚
情動的コミュニケーションの成り立ちとその意義

小 林 隆 児

精 神 医 学

第36巻 第8号 別刷

1994年 8 月 15 日 発行

医学書院

研究と報告

自閉症にみられる相貌的知覚と妄想知覚*

情動的コミュニケーションの成り立ちとその意義

小林隆児**

【抄録】 青年期自閉症の1例の治療を通して、自閉症に特有な知覚様態として相貌的知覚と生き生きした情動 vitality affect の存在を指摘した。乳幼児期に特徴的なこのような知覚様態が、自閉症では加齢を経ても活発に作動しやすいことが推測された。そのため彼らの環境世界は容易に相貌性を帯びて変容していくと考えられた。このようにして知覚された環境世界を他者と共有化するための機能を果たすべき言語によって意味づけることが彼らには非常に困難であることが、自閉症における認知障害の本質的な問題であることを指摘した。もし彼らが開かれた共同性からの撤退を余儀なくされる状況に置かれたならば、知覚した環境世界に対して彼ら独自の意味づけを行うことによって、妄想知覚とみなせる精神病理現象が生起するに至ると推論された。このような自閉症の知覚様態の特性は、自閉症において情動的コミュニケーションが成立するための基本的能力の存在を意味するとともに、その成立を可能にするような治療者側の関与のあり方の重要性を示唆していた。

精神医学
36:829-836
1994

Key words Affective communication, Autism, Delusional perception, Physiognomic perception, Vitality affect

今日、自閉症を精神分裂病の最早発型とする見解は症候学的ならびに疫学的観点によって否定された^{18,24)}。しかし、自閉症の長期経過^{9,23)}ならびに小児分裂病のカタムネーゼ調査²⁸⁾などにより再び両者の関連性²⁷⁾に注目が集まっている。このような動向の中で今日最も切実に求められていることの1つは、幼児期に自閉症と診断された症例において、その後分裂病状態が発現した際に、その発現のメカニズムを発達論的観点に立って検討していくことにある。そのことによって、自閉症と分裂病との関連性が成因論の立場から解明さ

れていく可能性が示唆されるのである。分裂病の成因論が回顧的データに大きく依存せざるをえないのに比して、自閉症研究から出発したこの領域の究明は、幼児期から直接的に得られたより信頼性の高いデータをもとに展開できるという点において、新たな可能性を抱かせるのである。

このような観点に立って、最近筆者は、幼児期に自閉症と診断された1症例の青年期に認められた自閉症特有な知覚様態をつぶさに検討する機会を得た。自閉症に特有な知覚様態が存在することは、彼らの行動観察と彼らが語った過去の回想によって明らかにされてきているが¹⁾、極めて間主観的事象である知覚現象の特性を、自閉症において解明していくためには個々の症例の存在様式そのものを詳細に把握していくという現象学的接近が強く求められている¹⁹⁾。

すでに筆者は自閉症の知覚様態の特徴として相貌的知覚²⁹⁾が根強く残存し、青年期以後もなお

1994年1月12日受理

* Physiognomic Perception, Delusional Perception and Affective Communication in Autism

** 東海大学健康科学部設置準備室(〒259-11 伊勢原市望星台), KOBAYASHI Ryuji: Tokai University, Developing Committee, School of Health Science, Isehara, Japan

活発に作動していることを見出した^{10,15)}。さらには自閉症と分裂病との異同を考える際に新たな視点を提供してくれると思われる現象として「知覚変容現象」の概念を提起した^{11,12)}。自閉症と分裂病の関連性を成因論的立場から解明していくためには、この「知覚変容現象」がどのように進展し、彼らの内的世界に迫り、彼らを精神病的破綻に導いていくか、その様相を彼らとの治療的かわりの中であらえることがぜひとも必要になってくる。そこで、今回は先の報告¹⁰⁾を踏まえながらその続編として本論を位置づけ、自閉症に特有な知覚様態が精神病状態の発現にどのように関与しているかを検討し、それから得られた知見をもとに自閉症治療のあり方についても再検討してみたい。

■ 症例提示

今回提示する症例は先の報告¹⁰⁾とともに、「知覚変容現象」¹²⁾の具体例(症例3)としてすでに発表された成人期自閉症の1例である。したがって、重複を避けるため就労後の経過を中心に症例を記載していきたい。

〈症例〉礼子(仮名)、現在21歳。知的水準、境界域精神遅滞。

幼児期から「漢字博士」との異名をとるほどに漢字の習得に没頭していたが、中学校卒業後、洋裁専門学校に通っていた頃から自己意識の高まりによって以前自閉症と言われたことにひどく敏感になってきた。この頃からもととの漢字への強い興味が異性への関心と相まって、「九州電力」の文字を気に入り、漢字の字形によって「笑っている」「泣いている」「怒っている」と述べるなど、漢字を相対的に知覚するようになり、「九州」の文字は「九」君と「州」君という憧れの対象へと変貌していった。このように青年期に至って性への関心と衝動が高まったことが彼女に環境世界の相貌化をもたらしたと考えられた。筆者は彼女との治療関係において、このような青年期心性を共有していくことに努めた。その結果大きな混乱を来すことなく、高校を卒業後まもなく、障害者に深い理解を持つオーナーが経営する小売店に就労できた。こうして順調に現実適応が可

能になっていったことと軌を一にして、彼女の内的世界でもそれまで没頭していた「九」君と「州」君はともに高校を卒業し、就職や進学の道を歩んでいった。

その後彼女にとって職場は充実感を味わえる生活の場として機能し、比較的順調な経過をたどってきた。ただ、就労後の数カ月は張り切りすぎた疲れもあってやや不安定になることもあった。そんな状態の時には、幼児期から認められていた知覚過敏が先鋭化していた。例えば、自宅の近所で車のエンジンをふかす音が聞こえてくるとあからさまに嫌悪の反応を示してパニック状態になり、車を壊したくなる衝動にかられることがあったが、彼女なりに工夫して耳栓をして音楽を聞いて紛らわしたり、窓を閉め切って聞こえないように努めるなど、自己コントロール能力がしだいについてきたことをうかがわせた。初診時からずっと pimozone 2~4 mg/日を服用していたが、就労後も「昔のように人を叩いたり、物を壊したりするかもしれない。薬を飲まなかったら人を叩いてしまうんじゃないかと思う」と内省的態度を見せ、薬の服用には積極的な態度を示していた。

ただ、彼女には幼児期から目立っていた知覚過敏がいまなお残存し、周囲の物音に過剰に反応するため、時折予想外なトラブルもみられるようになった。例えば、特に若者(礼子の言う「ヤンキー(不良の意)」)が車に乗って騒音をたてながら店の前を走り抜けることにひどく反応し、「若い人の車は意地悪く感じる、きつく感じる、私を刺激するような気がする」と訴えていた。

就労後1年近く経過した頃、仕事場が蒸し暑くいらいらしていたことも手伝って、店の前に止まったタクシーがクラクションを2回鳴らしたために、そのタクシーに乗り込んで運転手に殴りかかるという事態が起こった。以来、職場でも耳栓をするなど自己コントロールに努力するようになった。

仕事には一貫して生真面目に取り組んでいたが、自分が頑張っている姿を人に伝えたいとの思いから、昔のアルバムを取り出して6年前に出会ったことのある人に唐突に電話をかけて話すという行動に走ったり、就寝前に「九」君や「州」君に仕事を頑張っていることを伝えたいといってひとり呟いたりしていた。このような行動は確かに周囲に多少の戸惑いを引き起こすことはあったが、店のオーナーと筆者は一貫して共感的態度で接し、母親にも彼女の気持

ちを受容できるような心理的援助を行った。

彼女はもともと列車が大好きで毎日のように自宅や学校の近くを走る列車を眺めていた。ところが就職後 1 年以上経過したある面接日から寝台特急「富士」号を恋人だと主張するようになった(図 1)。「九」君と「州」君は 2 番目に好きだというのであった。高校生時代、専修学校に通っていた当時、学校が JR の線路沿いにあったので、授業の合間や登下校時によく通過する寝台特急「富士」号を眺めていたことは確かであったが、相貌的にとらえて「富士」君と表現し始めたのはこの時が初めてであった。彼女はその後の面接で「富士」君のことを夢中になって話すようになった。「『富士』君を見ていると、一所懸命客車を引っ張り、一日も休まず走っているのを感じする。『富士』君が私のことをどう思っているかわからんけど」と語り、「富士」君の生き方に共鳴していることが筆者にも伝わるのだった。

その後まもないある日、祖母と隣町の行楽地に出かけた際に、大分駅で列車に乗り、そこで憧れの「富士」君にばったり遭遇した時の心境を礼子は次のように筆者に語った。「午後 4 時 40 分に降りて乗り換えようと思ったら、駅の構内に『富士』君がいた。汽笛が 2 回鳴った。(それを聞いて)私のことを思ってくれたのかなと思った。「富士」君、一所懸命頑張っているなと(私が心の中で)言ったので、それに答えてくれたんじゃないかと思ってうれしかった」「高校時代は『富士』号を見てもただ見ただけだった。下りが大分駅に 11 時 5 分。その頃よく見ていた。今年の 9 月から、『富士』君と言うようになった。店長の M さんが東京の障害者の施設に見学に行った。その時から好きになった」というのだった。彼女にとって頼もしくかつ憧れの存在である M さんが、一所懸命に頑張っている自分たちを引っ張って働いている姿と寝台特急「富士」号がたくさんある客車を引っ張って一所懸命走っている姿がともに同様な質を持って力動的にとらえられたためであったということが母親との面接の中でしだいに明らかになった。

彼女の働いている職場はその後姉妹店を出すなど順調な発展を遂げ、その中で彼女は姉妹店の開店日に職場の代表として挨拶をしたり、テレビ報道の際のインタビューに回答するなど、周囲からの期待もますます大きくなっていった。彼女はそのような中で張り切って仕事に従事していたが、知覚過敏そのものはより一層顕著になっている様子だった。「乗用

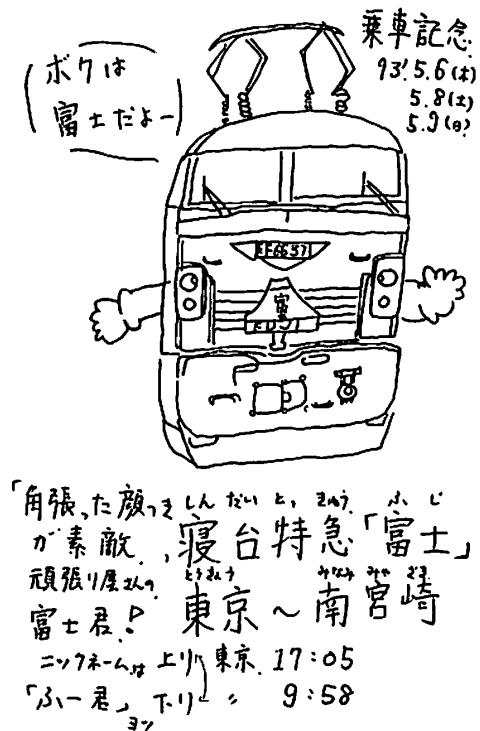


図 1 礼子が描いた「富士」君

車のエンジン音が耳触りで「ヤンキー」(昔はアメリカ人のことで、今は不良のことを指すと彼女は説明する)と言いたくなる」と知覚過敏の苦痛を訴えつつも、絶対に「ヤンキー」と口に出さないことを、「九」君と「州」君に誓ったり、電動工具(電気のコや電気かんなど)の音にも慣れなくてはいけないと自分に言い聞かせていた。このように頑張りを見せる一方で、自分自身の欠点も気にかけるようになり、「職場で同僚に非難された。協調性がないと思う。わがままで自分だけの店だと思っている。お互いの店だと協調し合う心を持ちたいと思います」と内省的に語るのだが、そんな時には筆者と視線が合うのを回避し面接中にもかかわらず本読みに逃げ込むのだった。さらには「先日(歩行障害のある)Kさんに商品を姉妹店に運ぶのをお願いした。軽い気持ちで持って行ってと言った。その日は寒くて雪が降っていた。Kさんは私に持って行ってくれないかと言ったので、結局自分が持っていったけど。自分は協調性がないと思います。オーナーから協調性のない人は働かなくていいですよと言われそうでつらい。Kさんごめんなさい。これから自分が運びます。お願い。許してください」と切々と訴え始め、筆者に頭を下げて涙にくれるのだった。

その後も「富士」君の話題は進展し、「寝台特急

「富士」君に恋人がいた。「さくら」さんが好きなんです。「さくら」は「富士」と同じ昭和 4 年当時登場した特急だ。「富士」君、私も好きだけど、「さくら」さんが好きだから私はあきらめる。5,000 円札の裏に「富士」さん(富士山)が載っている。100 円玉の裏に「さくら」の花が載っている。だから「富士」と「さくら」は赤い糸で結ばれていると思う。「さくら」カラーと「富士」カラーがある。「さくら」銀行と「富士」銀行がある。だから「富士」君は「さくら」さんが好きなんだ。私が「富士」君と言っても知らん顔しているのは「さくら」さんがいるからだと思う」と話すなど、「富士」君への思いは募るものの自分に対する自信のなさからか「さくら」さんにはかなわないという思いを抱いている様子だった。

このように「富士」君への思いは抱きつつも、仕事への態度は一貫して誠実そのものであった。しかし、職場で比較的頼りにされている彼女はつい多くの仕事を頼まれることになるため、時折終業の時間が遅くなることもあった。そんな時にオーナーに叩きかかるという衝動行為に走ってしまうことがあった。

就労して 3 年目の新年度を迎え、新人が入職してきた。職場の雰囲気が変わって緊張が高まったこともあってか、それから数週間後、自宅で母親に叩きかかるという事態が生じた。そのきっかけとなったのは、彼女の成人式に買ってもらった和服の値段が 7 万円すると母が言ったからだというのだが、母の説明によると、「(時刻や日付の時はよいが)数を数える時に、4(シ)とか 7(シチ)と言ったらいかん。「シ」と言わず「ヨン」、「シチ」と言わず「ナナ」と言ってほしい」らしく、「シ」や「シチ」と言われると、「死ぬ」「四苦八苦」という感じになる。苦勞するかもしれないから」とその理由を説明したという。

その翌日には、それまで自分が重要な役割を担っていた会計の持ち場にその新人が入ってレジを扱ったために、彼女はつい衝動的に彼を突き倒してしまうというハプニングが起こった。慣れない新人の立場に思いを寄せることが困難で、自分の活動領域を侵されることへの極度な不安が関係していることがうかがわれ、自閉症特有な過剰適応の側面を見る思いだった⁹⁾。このため、筆者はもう少し鎮静化の必要性を感じ、haloperidol 3~5 mg/日と levomepromazine 5 mg/日を投与した。彼女も薬を飲んでよかつ

たという評価を下してはいたが、足のふらつきと傾眠傾向が出現した。薬物増量の 4 週間後、彼女は「氣力がなくなる。からだがだるくなる」と薬の減量を訴えてきた。ただ、その際に訴えた次の話は筆者にとって大変な驚きだった。「職場から帰る時、他人から見られているような気がする。私を横目で見ている感じ」だと言うのであった。さらには、外来受診時にはいつも持ち歩いていた厚紙に張りつけられていた「富士」の活字を指しながら「この「富士」と同じような気がする。「富士」の「士」(図 2)が自分を見ているように感じる。だから逃げ出したい気がする」と真顔でおびえながら小声で筆者に訴えるのだった。このような言動の背景に、全身倦怠感が強いために思うように働けず、そのため自分に対する評価が下がることに対する恐れが存在していることが面接の中で明らかになった。筆者は即座に haloperidol を 1 mg に減量したところ、翌週には前回の訴えはきれいに消失していた。その後の半年は衝動的行動も見受けられなくなり、就職後 3 年間どうにか無事経過することができて現在に至っている。

■ 考察

1. 相貌的知覚と生き生きした情動^(E)

すでに小林^{10,15)}は本症例に認められる知覚様態の特徴として相貌的知覚²⁹⁾の存在を報告し、乳児に特徴的な知覚様態が自閉症では加齢を経てもいまだ活発に作動していることを明らかにした。

今回提示されたエピソードにおいて、彼女にとって以前から特急「富士」号は強い興味の対象ではあったが、尊敬している職場のオーナーが出張の際にそれに乗車したことが直接的な契機となって、その列車が相貌性を帯びたものに変容を遂げていることが示されている。ここにも相貌的知覚の存在を認めることができるのであるが、とりわけここで注目しなくてはならないのは、このような知覚様態の発現をもたらした契機の持つ意味である。礼子自身の陳述にも確かめられたように、オーナーの生きざまの中で感じ取られた力強く躍動的に活躍する姿が彼女によって力動的な様相をもって知覚されるとともに、彼女はそれと同質な

ものとして特急「富士」号もとらえることによってそれが相貌性を帯びていったものと理解することができるのである。

喜怒哀楽というカテゴリー性情動でとらえられる相貌的知覚のほかに、力動的な性質を帯びた生き生きした情動 vitality affect が乳児の体験様式の中で重要な働きをしていることが知られている²⁶⁾。生き生きした情動は形態、強度、動き、数、リズムなどといった人や物体の特徴が包括的で無様相な知覚という特性でもって直接体験されるもので、相貌的知覚とともに乳児の体験様式の特徴の1つとして重視されている。こうしてみると、本症例において「富士」号が相貌性を帯びて知覚された背景に、彼女において生き生きした情動が活発に作動していたことが今回のエピソードに如実に示されているのである。

2. 相貌的知覚とその意味づけ—妄想知覚との関連性について

それでは自閉症児はこのような相貌性を帯びた環境にどのように意味づけを行っているのであろうか。

礼子が外出した際に、駅で偶然出会った「富士」君との間で交わされた彼女の内的世界での対話は実に興味深い内容であった。特急「富士」号の汽笛を彼女は今の生きざまの中で意味づけ実に生き生きととらえていることがわかる。自分が「富士」君を力動的にとらえた気持ちに汽笛が応答してくれたと意味づけているのである。ここにも先に述べたような生き生きした情動の活発な働きが如実に示されているのである。前節ではオーナーの存在を力動的にとらえていたのに比して、ここでは自分自身が一所懸命頑張っている姿を人に知ってもらいたいという気持ちの高まりが背景に存在していたことを念頭に入れておく必要がある。つまり、彼女の中に作動していた生き生きした情動が環境世界の相貌化とその意味づけに深く関連していることがうかがわれるのである。ここでは、自己、他者、そして環境世界の様々な事象がまさに渾然一体となった融合的世界として彼女にはとらえられていることを今回の一連のエピソ



図2 礼子が脅えた活字「富士」の「土」

ードは意味しているといえよう。

さらに興味深いことは、彼女の情動興奮が強まった時期に鎮静化のために筆者が薬物投与を行った際に彼女が面接中にみせた一過性の脅え反応であった。「職場から帰る時、他人から見られているような気がする。私を横目で見ている」と訴えるとともに、いつも持ち歩いている厚紙に貼られていた「富士」号の文字が相貌性を帯びて差し迫ってきた事実である。真顔で脅えを示した彼女は、イタリック明朝体の活字「(富士の)土」の横線の右端に記された三角形を指さして「富士(の字)と同じような気がする。富士の【土】が自分を見ているように感じる、自分を見ているみたい。だから逃げ出したい気がする。怖い」と震えた声で切実に訴えていたのである。

薬物投与によって鎮静化はもたらされたが、彼女は「気力がなくなる。身体がだるくなる」と訴えていたように、薬物による全身倦怠が彼女の vitality を低下させたことがこのエピソードの直接的契機であった。そのため自分が思うように仕事をすることができなくなり、低い評価を与えられるのではないかという恐れが彼女の中に生じたのである。このように彼女の身体面の生理的な変化が外界の知覚そのものを変容させている事実は生き生きした情動そのものの特徴をよく示している。乳児は生き生きした情動という特性を他者の行動からのみならず、乳児自身の内部からも体験しているとされている²⁶⁾。乳児特有な体験様式が自閉症においても顕著に存在していることがこの

例にも見て取ることができる。

このように vitality の高揚や低下が極めて直接的に環境世界の知覚様態を変容させている事実は自閉症の精神病理を考える際にどのように位置づけたらよいのであろうか。小林¹²⁾は別の機会に自閉症の環境世界の知覚の特徴を「知覚変容現象」として抽出し、彼らにとって環境世界は容易に変容しやすいことを示した。つまり彼らにとっての環境世界は容易に相貌化を呈しやすく、そのことを彼らの多彩な精神症状や行動特徴の心理的背景として考える必要があるわけである。

通常我々は知覚された外界を自分なりに意味づけすることによって、自らの環境世界を客観化しようとする認知過程が働いている。したがって、自閉症児によって知覚された環境世界を彼らがどのように意味づけるか、その心的過程そのものにこそ重大な鍵が潜んでいるのである。この心的過程の解明によって初めて、今日まで活発に検討されてきた自閉症の認知障害の本質が明らかにされると思われるのである¹³⁾。

我々は共同性を帯びた世界の中で共通した概念を持つ言語機能を駆使することによって自らの環境世界を意味づけることが可能になる。そのことによって環境世界をあたかも不変性を持ったものとしてとらえ秩序づけることが可能になる。しかし、乳幼児期早期より対人関係の発達に重篤な障害を抱えてきた自閉症児にとってはこのような言語と認知の機能は質的に深く障害されることになる²⁵⁾。そのために彼らにとって環境世界を秩序づけることは極めて困難な作業になるのである。そこで、彼らは自分にとってより不変な性質を帯びた既知なる物を手がかりにして外界を彼らなりに強迫的に意味づけようと試みる。そのような生きざまを通常我々は強迫的こだわりとしてとらえているのである^{8,16,17)}。

自閉症に特有な知覚様態として取り上げてきた相貌的知覚や「知覚変容現象」の存在は、彼らがこのようにして知覚されたものをどのように意味づけていくのかその認知過程に問題があり、知覚されたものに他者と共有化できる意味を付与する

ことが極めて困難であることを示している¹³⁾。

記述精神病理学的観点からは、知覚されたものを病的に意味づける心的現象は妄想知覚とされているが²²⁾、本症例で認められたような自閉症の知覚様態は妄想知覚と近似した心的現象といえないであろうか。本症例において、知覚された事象が相貌性を帯びたものとして病者に迫り、それに対して病者は特有な意味づけを行っていることが示されている。ただ、礼子が寝台特急「富士」号を「富士」君と相貌的にとらえる契機となったのは、オーナーとの生き生きとした触れ合いであった。つまり礼子は自己の世界に閉じこもることなく、開かれた共同性のもとにあったため、その知覚様態は病的色彩(妄想性)を帯びていない。しかし、薬物の副作用によってもたらされた全身倦怠が契機となって生じた「富士」の活字に対する知覚様態は、被害関係念慮を心理的背景に持ち、そこでは相貌性の代わりに妄想性が付与されていることが示されているのである。

自閉症において成長してから露呈してくるこのような知覚変容は分裂病に起こる異常体験としての妄想知覚と現象学的には同じかあるいは近縁のものといってよいのではなからうか。ただそのことをもってして疾病的に両者を同一線上に置いて論じることには現段階ではあくまで慎重でなくてはならないであろう。自閉症と分裂病の異同をめぐる議論が最近再び活発になりつつある現在^{3,21,27,28)}、今回明らかにされた自閉症の知覚様態の特性は発達論的観点から今後さらに検討される必要があると思われる。

3. 相貌的知覚と情動コミュニケーション

礼子は好ましい治療環境のもとで就労し、生き生きとした生活を送っていた。つまり、彼女は開かれた共同世界の中ですばらしい援助者のもとに情動体験を共有できていた⁶⁾。乳児が未知なる環境世界に置かれた際に、その世界をいかに意味づけるかその重要な役割を母親が果たし、その心的機能は母親参照 maternal referencing²⁾といわれている。つまり、母親がかもしたす情動的な雰囲気重要な手がかりとなるとされている。彼女で

は職場のオーナーならびに主治医である筆者がそうした役割を果たすことによって(社会的参照 social referencing⁷⁾), 日々展開される新たな状況をそのような人々を通して意味づけることでもって生き生きとした生活を送れているということがいえる。

コミュニケーションの構造は、従来から主に取上げられてきた観念の授受のほかに、情動の共有という二重性をはらんでいることを考えると²⁰⁾, 相貌性を帯びやすい知覚様態を持つ自閉症児が精神病的破綻を来さないためには、情動の共有がコミュニケーションの基盤にしっかりと成り立っていることがこのほか重要であることが、本症例の治療経過に如実に示されている。もし、このように情動の共有が可能になるような治療環境に置かれず、自ら閉じられた精神世界に彼らが置かれていたならば、未知なる状況に対して他者と共有された意味づけを行うことは不可能で、自己特有な病的意味づけを行わざるをえなくなるのであろう¹⁴⁾。自閉症にみられる妄想知覚はこのような心的過程を通してはじめて成立する現象であり、そこでは妄想世界に身を置く自閉症者の存在を見て取ることができるのである。

乳児の情動的コミュニケーションが成立するための基本的要件として、このような相貌的知覚や生き生きとした情動の存在が重要な役割を占めているとされている²⁶⁾。とすると、自閉症児には情動的コミュニケーションが成立するための基本的能力が欠けている^{4,5)}のではなく、情動的コミュニケーションの成立過程そのものを困難にする他の要因が介在していると考えなくてはならないであろう。

本症例において、彼女が就労してすばらしいオーナーと出会うことによって初めてこのような相貌的知覚や生き生きとした情動が活発に作動し、そのもとで情動的コミュニケーションが豊かに展開するようになったという事実は、自閉症の治療を考えるに当たって、重要な示唆を与えているといえよう。自閉症治療がややもすると技術論に走る傾向にある昨今の状況の中で、治療にとってより

本質的に重要なことは、彼らの心を揺り動かすほどに躍動的で vitality に満ちた他者とのかかわり、すなわち情動的コミュニケーションが活発に展開するような対人関係の成立にあることを本症例の経過は教えてくれているのである。

注) 筆者は他の論文¹³⁾の中で vitality affect を Stern の翻訳²⁶⁾に基づき「生氣情動」と訳したが、その後鯨岡峻氏(島根大学教育学部教授)との討論を経て今回「生き生きとした情動」と変更した。後者のほうが理解しやすいとの理由による。この訳語は鯨岡氏の考案によっている。

本研究は平成5年度厚生省「精神・神経疾患研究委託費」(5公-5)による「児童・思春期における行動・情緒障害の病態解析と治療に関する研究」(主任研究者:栗田廣)の分担研究の一部として行われた。

本論の要旨は第16回日本精神病理学会(1993.9.30-10.1.京都市)で発表した。

本稿に対して貴重なご示唆をいただいた村田豊久教授(九州大学教育学部)に深く感謝の意を表するとともに、本症例の治療の機会を与えていただいた鶴見台病院(別府市)山本紘世院長にお礼申し上げます。

文献

- 1) Bemporad JR: Adult recollections of a formerly autistic children. *J Autism Dev Disord* 9: 179, 1979
- 2) Emde RN, Sorce JE: The rewards of infancy: Emotional availability and maternal referencing. In: *Frontiers of Infant Psychiatry*, edited by Call D, Galenson E, Tyson R, Basic Books, New York, p 17, 1983
- 3) Frith CD, Frith U: Elective affinities in schizophrenia and childhood autism. In: *Social Psychiatry: Theory, methodology, and practice*, edited by Bebbington PE, Transaction, London, p 65, 1991
- 4) Hobson RP: Beyond cognition: A theory of autism. In: *Autism: Nature, diagnosis and treatment*, edited by Dawson G, Guilford Press, New York, p 22, 1989
- 5) Kanner L: Autistic disturbances of affective contact. *Nervous Child* 2: 217, 1943
- 6) Kaye K: *The mental and social life of babies*. Mathuen, London, 1982(鯨岡峻, 鯨岡和子訳: 親はどのようにして赤ちゃんをひとりの人間にするか, ミネルヴァ書房, 1993)
- 7) Klinnert MD, Campos JJ, Sorce JF, et al: Emotions as behavior regulators: Social referencing in infancy. In: *Emotion: Theory, research and experience*. Vol. 2, edited by Plutchik R, Kellerman H, Academic Press, New York, p 57, 1983
- 8) 小林隆児: 年長自閉症児の認知障害とその精神病理学的特徴. 西園昌久編: 青年期の精神病理と治療,

- 金剛出版, p 273, 1983
- 9) 小林隆児: 24 歳の 1 自閉症者の精神病的破綻. 児精医誌 26 : 316, 1985
 - 10) 小林隆児: 自閉症にみられる相貌的知覚とその発達精神病理. 精神科治療学 8 : 305, 1993
 - 11) 小林隆児: 自閉症—その多彩な臨床症状をどのように理解できるか. 臨床精神医学 22 : 575, 1993
 - 12) 小林隆児: 自閉症における「知覚変容現象」の現象学的研究. 精神医学 35 : 804, 1993
 - 13) 小林隆児: 精神遅滞と自閉症—自閉症の認知障害に関する再検討. 神経精神薬理 15 : 773, 1993
 - 14) 小林隆児: 自閉症の妄想形成とそのメカニズムについて. (投稿中)
 - 15) Kobayashi R: Physiognomic perception in autism. J Autism Dev Disord (in submission)
 - 16) 小林隆児, 村田豊久, 吉永一彦, 他: 自閉症児における自閉性と認知障害に関する研究(第 1 報)—自閉症における状況認知と自閉度との関連性について. 安田生命社会事業団研究助成論文集 1989 年度 25 : 48, 1990
 - 17) 小林隆児, 吉永一彦, 村田豊久, 他: 自閉症児における自閉性と認知障害に関する研究(第 2 報)—自閉症と精神遅滞との比較検討. 安田生命社会事業団研究助成論文集 1990 年度 26 : 45, 1991
 - 18) Kolvin I: Psychoses in childhood: A comparative study. In: Autism: Concepts, characteristics and treatment, edited by Rutter M, Churchill-Livingstone, London, p 7, 1971
 - 19) 鯨岡峻: 心理の現象学. 世界書院, 1986
 - 20) 鯨岡峻: コミュニケーションの成立ち. 教育と医学 38 : 507, 1990
 - 21) 栗田廣: 精神分裂病と全般的発達障害. 土居健郎編: 分裂病の精神病理 16, 東京大学出版会, p 27, 1987
 - 22) Matussek P: Untersuchungen über die Wahnwahrnehmung. I Mitteilung. Arch Psychiat Nervenkr 189 : 279, 1952. II Mitteilung, Schweiz. Arch Neurol Psychiat 71 : 189, 1953(伊東昇太, 河合真, 仲谷誠訳: 妄想知覚論とその周辺, 金剛出版, 1983)
 - 23) Petty LK, Ornitz EM, Michelman JD, et al: Autistic children who become schizophrenic. Arch Gen Psychiatry 41 : 129, 1984
 - 24) Rutter M: Childhood schizophrenia reconsidered. J Autism Childh Schizophr 2 : 315, 1972
 - 25) Rutter M: Cognitive deficits in the pathogenesis of autism. J Child Psychol Psychiat 24 : 513, 1983
 - 26) Stern D: The Interpersonal World of the Infant. Basic Books, New York, 1985(小此木啓吾, 丸田俊彦監訳, 神庭靖子, 他訳: 乳児の対人世界—理論編, 臨床編, 岩崎学術出版社, 1989, 1991)
 - 27) Volkmar FR, Cohen DJ: Comorbid association of autism and schizophrenia. Am J Psychiatry 148 : 1705, 1991
 - 28) Watkins JM, Asarnow RF, Tanguay PE:

- Symptom development in childhood onset schizophrenia. J Child Psychol Psychiat 29 : 865, 1988
- 29) Werner H: Comparative psychology of mental development. International University Press, New York, 1948(鯨岡峻, 浜田寿美男訳: 発達心理学入門, ミネルヴァ書房, 1976)

Summary

Physiognomic Perception, Delusional Perception and Affective Communication in Autism

KOBAYASHI Ryuji*

The author pointed out that physiognomic perception and vitality affects are easily activated in cases of young female adults with autism. Such a perceptual mode is supposed to be very characteristic not only in early infancy but also in autism. As a result, autistic people tend to perceive their environment, the things-around-them, physiognomically. We can easily recognize and label those things-around-them because of our language ability. Language helps us to put our surroundings in a state of order. But autistic people have such poor cognitive-language ability, that it would be very difficult for them to take what they perceive as being in a state of order and communicate it through language. Such an active perceptual mode in autism reveals not an affective communication deficit, but the hyperactivity of perception in motor-affective manner. This might suggest that autistic people have an innate ability to have affective communication. Physiognomic perception, as well as vitality affects play an important role in affective communication. If autistic people could not have affective communication with others, they could not share the meaning of what they perceive physiognomically. As a result, they would draw unusual meanings about what they are exposed to. Such a psychopathological process might be called "delusional perception."

How and what they perceive and what meaning they draw from their perceptions is a most important problem in the cognitive deficits in autism. In the treatment of autism, knowledge of this may be helpful in enabling us to help autistic people to have affective communication not only with their mothers but also with their therapists.

* Tokai University